

2021.10.15 開催
第5回アカデミックカフェ
「日本学術振興会賞受賞記念」

マルクスの抜粋ノートと人新世の危機

経済学研究科 准教授 齋藤 幸平

概要 現代資本主義の矛盾が格差や気候危機として現れる中で、カール・マルクスへの再評価が進んでいる。新しい『マルクス・エンゲルス全集』（MEGA）の刊行によって、これまで見過ごされてきた環境問題へのマルクスの視点が浮き彫りになっているのだ。マルクスのエコロジーを基礎として、「人新世」の未来を考えたい。

キーワード マルクス, 社会主義, 資本主義, 自然, 環境問題, 格差問題



会場の様子

マルクスを専門に研究されている齋藤先生より、どういう経緯でマルクスを研究するに至ったか、マルクスの抜粋ノートからマルクスがどういうことを考えていたのか、地球の環境危機・気候変動問題を考える際に、マルクスの思想が役立つこと等をお話いただきました。

気候変動の問題が注目される昨今、地球環境は非常に劣化していて、生物多様性の喪失や窒素循環の攪乱など、非常に大きな問題を抱えています。その状況を表すために「人新世」という言葉が使われています。「人新世」とは要するに、人類の経済活動の痕跡、例えば、ビル、道路、農地、ダム、ゴミ捨て場などが地球の表面全体を覆ってしまっている時代のことを指します。その結果、気候変動やパンデミックのような世界規模の危機こそが「人新世」のニュー・ノーマルになっています。私達はこの危機に立ち向かうにはどうしたらいいのでしょうか。

そもそも、資本主義で絶えず経済成長を続けながら、砂漠化や気候変動等を解決し、環境負荷を減らしていくことには困難があります。だとすれば、どこかで経済成長にブレーキをかける必要があります。そうしたことから、今、若い世代を中心として、「システム・チェンジ」を求める声が上がっています。

「資本主義じゃないシステムって何だろう？」

私達は資本主義が当たり前で、身近になり過ぎていて、資本主義じゃない、皆が幸せに暮らしている持続可能な社会が想像できません。環境問題を前にして資本主義が行き詰まったり、格差が拡大しつつある中で、社会主義のイメージが強いマルクスという人物を使って、ソ連とは違う社会主義的なものをもう一度考え直すべきではないでしょうか。

学生時代からマルクスに興味があった先生は、リーマン・ショックや派遣村の活動から、労働者の貧困や格差問題を考えるには、資本主義についてもっと理解を深める必要があるとして、マルクスを研究するためドイツへ留学されました。その後、福島第一原発の事故があり、環境問題への関心と経済成長を優先する思考を反省し、エコロジーに対する関心が強まっていったそうです。

ドイツ留学中に、MEGA というマルクスとエンゲルスの新しい全集を編集する日本人研究者チームに参加され、編集作業に携わった先生は、マルクスの抜粋ノートを読み解いていくと、マルクスは晩年、『資本論』を完成させるために、自然科学を熱心に研究していたことがわかり、衝撃を受けたそうです。『資本論』を完成させるために自然科学を勉強していたとすると、自然科学と資本論の関係を再構成しないといけないのではないかと。マルクスは、資本主義のもとで、人間が自然をどんどん変えることによって、しっぺ返しを受けた

り、技術を発展させることで別の危機を引き起こしたりする、そういうたちごっこを丹念に研究していました。そこにマルクスの環境思想があったのです。

「こうして大土地所有は、社会的な物質代謝と自然的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すのであり、その結果、地力が浪費され、この浪費は商業を通じて自国の国境を越えて遠くまで広められる（リービッチ）。」

(MEGA II/4.2: 752 f.)

マルクスは晩年、土壤疲弊に始まり、森林伐採、畜産、石炭など、自然からの収奪を研究しており、問題意識が拡張していく過程をノートに記録し、持続可能な未来の在り方を模索していました。

マルクスが最晩年に思索を続けて書き残したノート。先生はこのノートを調べることで、ソ連創設者の一人であるマルクスのイメージとは違う、持続可能で経済成長に依拠しない社会こそが目指すべき社会だという考えを持つ、21世紀の新しいマルクス像を再構築されました。

マルクスの問題意識の発展形として、「物質代謝の亀裂」を別の問題にも応用できるだろうと考え、マルクスが当時知らなかった気候変動や地質循環、現代のテクノロジー等にマルクスの方法を使って応用していく研究が進んでいます。マルクスの研究があることで、現代においてもマルクスならこの問題をどう分析しただろうと考えることができます。先生は最後に、「マルクス経済学は時代遅れと思われるがちですが、むしろこういう時代にこそ、経済学の多様なアプローチが必要であり、そうした発想が新しい社会を作っていくきっかけになると考えます。」と述べられました。

発表者紹介

齋藤幸平 大阪市立大学大学院経済学研究科准教授 博士（哲学） 専門は経済学説、経済思想。現代社会における諸問題を解決すべく、マルクス経済学をテーマに、自然科学と経済学の融合を試みて研究を行う。研究成果は、『大洪水の前に』（堀之内出版、2019年）、『未来への大分岐』（集英社新書、2019年）、『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020年）など。2018年にはマルクス経済学において最高峰賞である「ドイッチャー記念賞」を日本人初、史上最年少（当時31歳）で受賞。